

## 測定の問題 (II)

小和田 正  
生産システム工学科  
(1999年9月3日受理)

## Foundations of Measurement (II)

Masashi KOWADA  
*Department of Systems Engineering*  
(Received September 3, 1999)

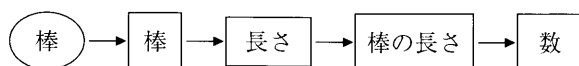
In this article, we discuss the problem of measurement which is the foundation of science and its applications to technology. The action of measurement is an autonomous behavior of an object with free will, and contains many relationships with several problems in epistemology. Our main aim is to discuss how measurement links the real world and the ideal world.

### 第二章 主観と客観

#### 2.1 測られる物と測る者

物を測るにはまずその対象物がなければならない。したがって、対象物の存在を前提にしなければならないかのように見える。物理的な実体に付随した量、たとえば水の温度や車の速度などを測定するような場合、水や車が計られるべき存在物であるかのように考えられる。そして測る者は測定の対象物の外部にある計測機器や測定者である。

しかし測定の行為をもっと詳細に見れば、そこにはもっと細かなカテゴリーが見て取れる。棒の長さの測定モデルについてそれを図示すれば、



と描くことが出来る。この図の中の最初の棒は知覚された目の前にある現象としてのリアルな棒であり、次の矩形で囲まれた棒は概念としての棒、数学的な長さの概念、それに対して棒の長さという概念、そして棒の長さに対応づけられた長さの値としての数である。

普通我々は観測者の外部に棒という実在があり、それを観察することによって棒の像を得てそれに棒という名前を付ける、すなわち一つの概念を形作る。次に棒の長さの概念を定義するが、それはもっと一般的な線分の長さという概念を適用する。そして長さを持った線分という概念とリアルな棒とを対応付ける、すなわち測定によっ

てその棒の長さの値を得ると考える。

ときには、測定結果を直接数値として表示してくれるような計測機器を用いることで、一挙に測定値を得ることもある。この場合でも上の図の中間に書かれた概念は計測機器の構造に内在している。

この図式を大別すれば、「リアルな棒」と「棒の長さという概念」の二つからなるとも考えることが出来る。従って、測定はリアルな物と概念の対応であると云うことが出来る。このようにこの図式は、客観と主観の二元論に抵触するが、客観と主観の二元論の克服は哲学の根底的な問題の一つである。したがって測定の問題はこの哲学の問題と関わりを持つことになる。

これらの哲学的問題を直接に論じるのは我々の当面の問題ではないが、測定の問題にどうしても関わる部分について論者の見解を概括しておく必要がある。結論的に云えば、我々は知覚空間と認識空間なるものを設定し、これらの空間にこの議論の全ての根拠を置くことによって、二元論の議論の泥沼に落ち込むことを避けようと思う。知覚空間と認識空間については2.2で後述するが、これらの空間は測定の問題を考える場として暫定的に設定するものであり、二元論について系統的な議論の場とするためものではない。

諸学の学としての哲学を目指した古典的な哲学に対し、ポストモダンの哲学による批判、新プラグマチズムによる批判等が盛んな現代であるが、我々は測定の行為に即して、測定のどんな問題が哲学のあるいは自然科学のどんな問題に抵触するかを考察するのが本論の目的である。

カントは「純粹理性批判」<sup>1)</sup>において「物自体」の設

定の上に立つ形而上学が二律背反に陥ることを、彼のいわゆる批判的方法（懐疑的方法）によって論じている。以来、ヘーゲル、ニイチェ、フッサール等によって、この客観と主観の二元対立の問題が様々に変容して論じられてきているが、ヘーゲル批判としてマルクスが登場し、その後社会主義の衰退とともに、マルクス主義批判が席卷し、それ以後、構造主義、ポストモダンと議論のモードは変わりつつあるが、現在に至ってもこの問題は必ずしも収束していないように思われる。

一方、リチャード・ローティによる諸学の学としての哲学批判などが現れ、体系的哲学に対してメタファーを基調とする啓発的哲学が提唱されている。彼の立場はデューイ等のプラグマチズムに連なるものである。<sup>(6)</sup>

一方、紀元150-250頃、ナーガールジュナ（龍樹）が「中論」でいっさいの存在を有部とする有部アビダルマ派の小乗の思想に対し、一切の存在を空とする大乘般若の思想をもって対決した。ナーガールジュナは物の存在を主張することを、「八不」を上げて論破する。しかし必ずしもナーガールジュナは物（自性）が存在しないと主張しているのでもない。「あらゆる存在に自性というものがあるとはいえない」ことを、二律背反的な言説を駆使して論ばくする。彼の主張は「中庸」を主張するものであるが、それは「空」に深く関わっている。その時代には、空がまた実在するかどうかの論議もなされているが、ナーガールジュナはその空の存在論を主張した訳ではなく、自然法的な有部の思想が持っている二律背反性を追求し、実践的空を主張したのである。<sup>(8)</sup> 彼の有部批判は、カントの物批判と一部類似しているが、ナーガールジュナは実践へと向かい、カントは道徳的人間像の確立へと走った。我々はここでは二人の比較に直接触れることはしないが、測定という行動の局面に限定した場合、二元論自体に絡め取られることなしに、測定の問題にどのように立ち向かうことが出来るかという実践的立場の設定を考えると、カントはあるべき人間像を作り上げようとしたのに対し、ナーガールジュナの立場が実践を目指したことは、物自体の存在を批判する両者の立場の相違がその大きな相違になっていることに注目したい。カントは飽くまでも言語によって規範を確立しようとしたのに対し、ナーガールジュナはそこに実践を置いたのである。

我々は、測定の対象物（現象）から観測者に与えられる情報を認知することから始めよう。そして我々は知覚空間とその部分空間である認識空間というものを持っているとするのである。

カントは自分の懐疑的方法について次のように述べている。

「双方の側で誠実に考えられ、また知的に行われている

論争について、誤解されている点を発見するに努め、こうしてあたかも賢明な立法者のように、当面の争われている問題に関して裁判官たちの陥る当惑を参考としながら、裁判官たちの取り扱う法律にふくまれている欠陥と、その法律に未だはつきりと規定されていない点を明らかにしようとする」（岩波文庫「純粹理性批判」中巻101ページ）。我々も知覚空間や認識空間の存在を主張することに眼目があるのではなく、それらを設定することによって我々が如何に我々の状況を説明できるか、その実践的可能性を明らかにして、我々の進むべき道を探ることにある。

デカルト以来、カント、ヘーゲル、ニイチェ、フッサールと続いてきた客観と主観の一致を巡る哲学の基本的な認識論の問題を、我々は知覚空間や認識空間の中に押し込め、ここでは現実と理論の、更には測られる物と測る者との関係を論じる場を設定しようというのである。カントの純粹悟性は認識空間の論理形式として、また物自体ないし客観の世界は知覚空間によってのみ捉えることが出来るものとし、物自体は知覚空間と情報の関係として溶解されるものとする。したがって客観なるものは固定的に外部に存在するのではなく、情報が世界ないし環境の状態と知覚空間のダイナミズムに依存して生ずるものになる。またフッサールの「原的直感」は知覚空間が自分自身に対する存在感覚であると説明しておこう。この感覚の中に、客観の世界や物自体の確固たる存在感が生まれると考える。

自己の存在を否定するのでなければ、この意味で世界を否定することは意味を失う。客観性とは、我々の知覚空間に生じるダイナミズムに如何に普遍的共同連帯的知覚がもたらされるかということであり、「客観的真理」といったものではない。後述するように、測定も「真の値」を得ようとするものではなく、如何に普遍的共同連帯的値を得るかということである。

## 2.2 知覚空間と認識空間

我々は外部から情報を取り込み、それを元に自己の外部という世界を創造し、客体化する。情報は必ずしも意識的に取り込むとは限らず、アプリアリに取り込まれている。知覚空間が肉体のどの部分にどのようにあるかは問題ではない。知覚空間が肉体のどこかに偏在すると見なすのは知覚空間がリアルな物であると見なしてしまうことになる。肉体とではなくて「身体」との関係が問題なのであるが、知覚空間と身体論についてはここでは論じない。また情報の伝達を、外部の物体が内部に移動してくるようなものとする類推は、物自体の存在を前提にすることになるから除けなければならない。情報はいわばそこに生じる現象なのである。あえて外部内部という

言葉で云うとすれば、外部と内部の関係性である。しかし我々は内部や外部が互いに独立に存在する存在物であるとは考えない。便宜上、ときによって概念的に外部(内部)なるものを設定したりするだけである。我々は、内部外部は物理空間における空間概念としては用いない。知覚空間は自分自身を認識する事は出来ないから、自分の外部というのは意味をなさないからである。

知覚空間には、その部分空間として、認識空間を含む。意識的な思考、論理的な思考といったものはこの空間における認識である。その特徴は言葉や符号が用いられることである。それらは知覚空間から写像されたものである。写像とは  $a, b$  の二つのものがあり  $a$  が  $b$  に対応するといった数学で用いる写像ではなく、 $a$  と同時にその像  $b=f(a)$  が生ずることを意味する。 $a$  は「知覚」されるが「認識」されない。認識されるのは像  $b$  である。ここでも  $b$  が在ってそれを認識するのではなく、認識するとは  $b$  が生じることである。知覚空間の知覚は情報を取り込むことであり、言語化されたり論理化されることがない。知覚空間の中の情報が上に述べた意味において認識空間へ写像されることによって初めて意識化される。したがって意識は情報そのものでもなければ実体でもない。意識が組み立てた世界像は、したがって外部の世界そのものでもない。認識空間には論理構造があり、理論はこの認識空間に構築されるものである。カントはこの構造に理性の根拠を求めたものという事が出来る。

知覚空間にはこのような論理構造、すなわち我々の論理に捉えられるような有限的限定的な論理構造の存在は指定できない。

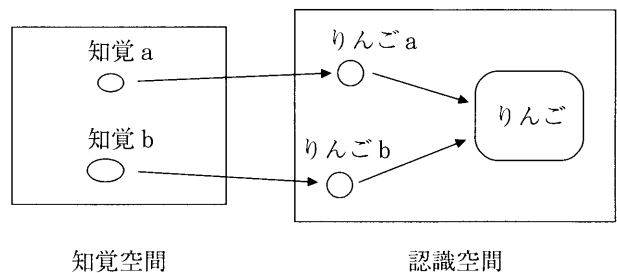
哲学の歴史において、客観と主観が乖離したままの状態を克服しようとして幾つかの努力がなされてきた。デカルトの「我」を支えるものとして「神」が置かれ、フッサールにあっては「原的直感」を設定し、それを克服しようとした。我々は原的直感の代わりに知覚空間を設定する。そして知覚空間は部分空間の認識空間とダイナミックに交流する。

同じ林檎を二人の人が眺めても、得られる情報は同一であるという保証は何もない。「同じ林檎」というのは言語によって名付けた概念の同一性のみを保証するものであり、二人の知覚空間が得る情報は相異なっている、異なる知覚が認識空間に同一の写像の像を結ぶことはあり得る。というよりも同一性は認識空間における概念である。シニフェは知覚空間に生じると考えよう。

知覚空間から認識空間への写像は、知覚空間(認識空間を部分空間として含む)の状態に応じてアプリアリに瞬時に決定される。フッサールがノエシスと呼んでいるものは知覚空間に相当し、ノエマは認識された概念に相

当する。

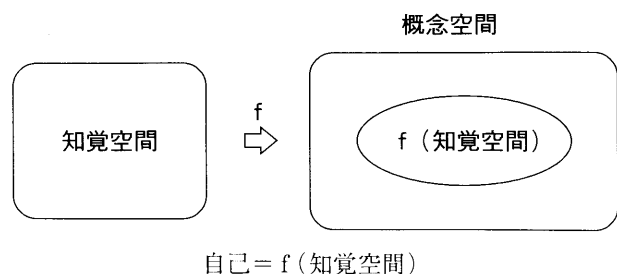
知覚空間と認識空間は独立に存在する物ではないし、どちらも実体として存在するものでもない。知覚や認識が行われる場を意味する。言葉によって言葉でない物は名指す事しかできない。名指しは逆写像の役割である。知覚が生じ、それに対応する意識が生じ、それが概念化されると、その概念に基づいて、それを生起させた意識群が決定されたとき、そこに逆写像があるという。外部に存在する物を名指しているように見えるが、逆写像は知覚に捉えられた意識達一意識群を名指している事になる。この対応はユニークではない。したがって逆写像によってただ一つの意識を明確に名指すことは保証されない。これは林檎であると指摘する行為をなすことは出来るが、林檎という言葉によって特定の林檎が名指される訳ではない。原像達は認識空間において一つの同値類をなす。あの林檎やこの林檎の像も、林檎の原像の同値類の要素をなす。



知覚空間の要素は指定できない。なぜならこの要素は概念ではないからである。これは超越論的実体とでも云うべきものであり、上の図の知覚  $a, b$  は便宜的なものである。

自己は知覚空間総体を概念として捉えた概念であり、知覚空間は自己であって自己でない。すなわち、知覚空間それ自身を認識空間の部分空間である概念空間へ写像した知覚空間の像である。

したがって自己も実体として存在していると主張するわけにはいかない。



自己 =  $f$ (知覚空間)

(この図は自己を便宜的に図式的に表したものであるが、それぞれが現実の空間にも、あるいは脳内に偏在するものでもない)

### 2.3 意志と主体性と測定

我々の行動は知覚空間に密接に連なっている。知覚はスクリーンに外部の映像が映し出されるような単に受動的物理的現象ではなく、知覚は同時に世界を決定し、と同時に自己開示するものである。我々は世界をこれこれの物としてみている。そして同時にその世界の前に立っている自分が開示される。何の意味も価値も付加されない知覚はあり得ない。

欲望も知覚の一種であり、欲望とは認識空間へ写像する前の欲動であり、名付けられないものである。一方食欲や名誉欲などは、欲動が認識空間の中で状況に応じて名付けられた概念であり、いわば、名付けられた欲望である。何か食べたいと思うのは、ある種の欲動が生まれ、瞬時に食べるという概念に結びついたものである。「腹が減った」というとき、欲動が既に認識空間の食欲に写像されてしまった概念になっている。

逆に、我々は概念に基いて行動することもある。12時だから昼食を食べようとするのは、必ずしも欲動によって行動しているのではなく、食事の時間や健康保持の方法という概念や知識に基づく知的行動である。このような行動は必ずしも情動や欲動を伴うとは限らず、快感原則と矛盾することがある。ハイデッカーの「気遣い」\*

測定に明確な基準がなければ、いやあったとしても、最後は主体的決定がなされなければならない。主体が立つ場合は、あれこれの理由によって意志決定をするのではない。あれこれと思考することは事象の認識のことであるが、終局的には主体自身の問題になる。キルケゴールを引用しよう。

「主体的問題は主体性そのものに関することであって、事象に関する問題ではない。つまり、問題は決断ということにあり、すべて決断は主体性の中にあるから、そこには客体的には事象の跡形さえない。なぜなら、事象が問題になると、主体性は決断の苦痛と危機からいくらか目をそらせ、問題をいくらか客観的にすることになり、それと共に決断が延期されることになるからである」

このようにキルケゴールは、主体的な実践的認識と客観的な理論的認識との非両立性を指摘している。

我々はこの非両立性のもとで測定の最後の段階で、後に述べるように「真の値」は存在しないが故に、主体的に「決定」をしなければならないのである。

理論を現実に適用するということは、この折り合いをつけること、すなわち主体的決定＝行動をすることである。理論を現実に適用する理論というものは存在しない。理論と現実の間には、この意味で、人間にとってどうしようもなく越えがたい千尋の谷底が口を開けて待っている。我々に出来ることは行動だけである。このような状況にあって、我々は何をなすべきであろうか。

## 第三章 測定の問題

### 3.1 測定と価値

棒の長さを物差しで測る単純な例を考えてみよう。「棒の長さ」と云う言葉は「棒」と「長さ」が結びつけられている。「棒」は定義された言葉ではなく、通常の使用によれば、リアルな目の前に実在するとみなしている「棒」に名付けられた言語であり、そのシニフェがあの棒である。

次に「長さ」とは何かを定めなければならない。これは明らかにリアルな実在物を意味するものではない。

ここで使われている「長さ」は、数学において、一次元ユークリッド空間の図形（部分集合）の測度として厳密に定義されている科学用語である。

測度の概念はコルモゴロフによる定義が広く流布している。測度の中でも特にルベグ測度が日常的に用いられることが多い。測度概念を用いて何か考察する場合、どの測度を取り上げるのが良いかは、相対的な問題であり、何らかの理由で主体的に決定しなければならない。我々の問題ではどんな測度でもかまわないが、便宜上ここではルベグ測度を取り上げるものとしよう。

一次元ユークリッド空間におけるボレル集合体の要素（図形）に対してその図形の長さは次のような手順で定義される。まず閉区間 $[a, b]$ ないし開区間 $(a, b)$ という部分集合に対して、数 $b - a$ を閉区間 $[a, b]$ と開区間 $(a, b)$ の長さとして定義する。一般のボレル集合に対しては、測度の拡張定理を用いて長さの定義を拡張する。

測定者はリアルな棒を目前にして、その長さを測ろうとしている。勿論、長さは概念であり、リアルな存在物ではない。そのために「棒」を概念化する。現実の棒に対しては、棒の両先端をそれぞれ点とみなし、この二点を結ぶ線分を一次元空間の部分集合と見なし、その集合の長さを持ってリアルな棒の長さとして見なしている。棒の両端というのも概念であり、実際棒のどの部分とその点に相当するかを主体的に決めなければならない。点も概念だからである。

実際の測定の行為としては、まず棒の端を視覚的に「適当に」特定して、そこに物差しの目盛りを宛う。この行為において、「棒の端」は概念であるから、知覚された棒の像に「棒の端」と思われる点を選び取っている事になる。我々の用語では概念空間において、知覚空間から得られた「点」に対して「棒の端」という概念を対応を付けたことになる。こうして我々は、純粋な棒の知覚には本来何も概念は付属していないにもかかわらず、端を持った棒のイメージなるものを作り上げる。犬を見るのに、犬として見るのと同様な行為である。棒の測定の場合には意識的行為であるが犬の場合は知覚の特性と

して、瞬時に行われるという点が相違点である。概念を伴わないものを見るのは、驚きであり恐怖である。初めてみると思われるものも、多くの場合、類似のものの概念で代行されていることが多いので、驚きや恐怖は柔らげられる。

知覚する行為には同時に、知覚者としての主体性が先験的に惹起される。したがってそれにどう対応するかという判断が要求される。知覚の行為は、レンズを通して光が網膜に像を結ぶような単なる物理現象ではないのである。言い換えれば、見ようとする意識の集中一意志がなければならない。測定行為は真偽の判断ではなくて後に述べるように、価値判断を伴う行為であるから、測定者を純粹に認識者としてだけ考えることは片手落ちであり、実存的存在としての人間も同時に考えなければならない。デカルト以来フッサール等によって論じられてきた主体-客体の問題が、人間存在の主体-客体という図式のなかでニイチェやサルトル以降の人間存在の哲学によって批判されたのは実存的人間の側面が十分に論じられていないからである。測定者はつねに測定の目的を持つから、そこには価値の問題が必然的に付着する。

さて、このようにして「棒の端」と思われる点を選び取るときに、我々は一つの判断と決断をしている。同様に目盛りとその「点」が一致していると結論するときも判断と決断をしている。決断にはこの測定をここで完了する事を選択する決断が含まれる。

このように測定の行為には概念空間から知覚空間への写像を定めることが内蔵されている。これは知覚空間から概念空間への写像の逆写像であるから、一点の像からその逆像の要素を選び取るのは先験的には決定されるとは限らず、判断や決断が要求される。

もう一つの例を考えてみよう。丸い棒の太さをノギスを用いて計測するとしよう。

棒の長さを測る例と異なる点は、棒の端の点を選ぶという測定者の視覚に基づく行為に相当するのが、ノギスがそれ以上動かすことが出来なくなる点として物理的に決定されるかのように見えることである。しかし後者の場合も、棒が完全弾性体であるという前提なくしては、それ以上動かすことが出来ないという状態が完全に物理的に定まるものとはいえない。矢張りここにも観測者の判断と決断が必要とされる。

この例を持ち出したのは、たとへどんな物理的計測装置を測定に介在させても、計測装置に付与している機能は概念であるから、計測装置の機能に問題にしている概念が一对一に対応しているとは保証されない事を示したかったからである。人間の五感を越えた分子、原子の次元の微細な測定に如何に科学の精を凝らした測定装置を用いる場合でも事情は同じである。

つまり測定には、判断と決断という価値に関わる行為が避けられないと云うことである。ここで我々は価値や自由意志という概念に直面せざるを得ない。

目で見てほぼ10センチメートルの棒を測定して、仮に10.2と100.3の二つの測定値を得たとしよう。こんな場合、我々は100.3は明らかに何か記入ミスなどの原因によるものだろうと考えて、即座に10.2の方を選ぶだろう。これは目前の棒の長さは直感的にほぼ10センチメートル程度であろうとする経験的な判断に基づくものである。このような判断も何も理由がなかったら、これを棄却する理由もない。これは経験に基づいた判断である。

またある人の身長を測定するのに、普通は少数第2位まで測定しようとはしないだろう。多くの場合、その必要性-使用目的が見あたらないからである。特に工業製品の作成のような使用目的が第一義にある場合には、製品の仕様書に完全に一致していることが絶対の条件ではなく、充分使用に耐えうる製品であるかどうかという質的な判断で、品質の基準が決められる。仕様書の基準は概念であり、製品はリアルなものだから完全な一致ということは本来無意味なことである。充分使用に耐えうるにはどの程度の値であればよいかという判断は、客観的基準ではなくて連帶的志向の程度によって定めらる。購入しようとする新車のドアが、設計図と数ミクロン異なっているいるとクレームをつける人は正当であるといえるであろうか。製作者側も、そのために市場に出すことを躊躇う必要があるだろうか。これでも充分に使用価値があるだろうという連帶的価値感がこれを支える。これらの例は、測定に際し、何かしら測定値を巡る経験や価値観という要因が付きまとっていることを示している。古代ギリシャのある人々は三角形の面積を二辺の積と考えていたというが、そのことによって殆ど不都合を感じなければ、それを改める必要もなかったに違いない。

測定が真の値を求める行為であるという錯覚が発生するのは、客観-主観という克服しがたい二元論に束縛されていることによるものであり、現実に測定を有意味なものにしているのは、真の値だからではなくて連帶的価値への志向なのである。従って測定は、純粹に自然科学的行為ではなく、実存的人間の行為である。概念が世界を完全にカバーする事は出来ないのであるから、概念に基づく行為は思いよぬ事態をも引き起こすのは必然であろう。ただそのような事態が連帶的志向のなかで無視すべきかどうかにかかってくる。

また測定回数を多くすれば、このようなミスは均されて、測定回数を増やせば増やすほどより真の値に近づくことが出来ると云う思いこみがある。判断や決断によって生じた誤差が小さなものになることが出来るというわ

けである。これは確率論における大数の法則と呼ばれる定理の誇大な解釈か、もしくは経験則をこの定理が理論的に証明しているとする誤解である。大数の法則は、独立な有限回の測定値の算術平均は、測定回数を大きくすれば、或る条件の下で確率1で平均値に収束する事を主張するものである。これは充分大きな回数の測定値が平均に近い値を得ること保証するものと考えられ勝ちである。しかしこれは数学的概念の世界で認められるものであって、たとえば目前のリアルな棒の測定値について主張するものではない。一連の測定値が定理における確率変数列の実現であるかどうかの理論的な保証は何もないからである。たとえば、独立性がみだされるか、出現した測定値の列が、定理で指定された確率1の事象の点であるかを理論的に完全に示すことは不可能であるからである。また数学的にも単調に平均値に収束する事は主張されないで、測定回数を増やせばより平均値に近い値になるとも言えない。現実には、統計的経験を通じて連带的価値を共有することで、統計的事実とされているのである。しかもこの定理において考察されている対象は、同じ性質を持つ確率変数の平均値であり、測定値が

$$\text{測定値} = (\text{真の値}) + (\text{誤差})$$

の図式で捉えられていて、誤差は測定を繰り返すことによって漸近的に排除可能であると考えられている。真の測定値ない棒には長さが自性として存在しないのであるから、これに対する理論的保証はないのである。

### 3.2 パシュラールの近似論

「近似的認識論」<sup>(2)</sup>においてパシュラールは、科学的認識について論じているが、その著書の中で、測定についても言及している。彼によれば、「測定は基本的な認識論、つまり、経験の算術化の基礎をなすものとして現れる。測定こそ存在の恒久性を保証し、この存在にしかるべき地位を与え、ついには科学的な存在論を正当化するところのものなのである。(そこには多くの取捨がある。単純な原理のみであることが堅固にする) 観察は一時的なもので、その場を離れると消えてしまう」と述べている。

彼は測定が存在の恒久性を保証する行為であると位置づけているのであるが、彼の立場は1934年の国際哲学会議で述べているように、「科学的哲学は、科学的認識に関して、伝統的哲学が科学に課してきた限界を、なんらかの仕方でも系統的に破壊しなければならない」とする科学的認識を正当化しようとする立場にある。

そして科学的認識の不確かさについては、「先行する認識に含まれる誤りを絶えず正しながら限りなく精密さを求めていく本質的に近似的な過程」として、科学的認識を捉えるようとしている。

彼の考えの根底には、人間の論理的思考への信頼があり、物理的世界の認識は、「誤りを絶えず正しながら限りなく精密さを求めていく本質的に近似的な過程」(p.66)の中に真の姿を現すものであるという確信がある。彼が「繰り返し」を持ち出すのは、「しかし測定がどんな記述をもたらすにせよ、対象の多様性がそれで尽くされるわけではない。論理学の対象は正確に限定されていて、枚挙される性質以外は持たないのに対し、物理学の対象は未限定の複合体である」(p.70)。情報の取り込みの不確かさと共に、論理の世界が正確に限定されていて、一挙に物理的世界の全てを取り込むことが出来ない事への補助手段としてである。このような近似的な過程の果てに、真の物理的世界が現れるという信念に裏付けされているように見える。これは、ヘーゲルの、弁証法的に認識が深まり、ついには完全な世界の認識に至るという歴史哲学を思い起こさせる。ここにも真の客体の存在が夢見られていると言えよう。

しかし、問題は「誤りを訂正する」とは何を意味するのであろうか。丁度、ヘーゲルの弁証法の中で、止揚されるとは何処へ止揚されるのか、という疑問と同じ疑問が生じる。真の測定値とは何であるかと同じ問題である。

### 3.3 連帯的志向

分析哲学者であるローティは著書「哲学と自然の鏡」<sup>(6)</sup>において、諸学の学としての系統的哲学批判をおこない、大きな驚きを与えた。そして代わって啓蒙的哲学を奨めている。彼は職業哲学者の自己イメージが、<自然の鏡>というイメージのもたらす職業的呪縛に落ち込んでいることを詳細に考察し、基礎付け主義の哲学理念に対し、その不可能性と無意味性をみている。それに対して彼は人間の諸活動を「社会的実践」として捉える。哲学史の中では、基礎付け主義の哲学の系列から外れるものとして、デューイ、ウイトゲンシュタイン、ハイデッカーを真剣に受け止めることを強調している。これらの名前からは実践的と実存的という言葉が思い起こされる。

測定の行為の背後にはハイデッカーの<気遣い>が蠢いていて、価値や意味を求めて行動する姿と重さなってくる。

一方でローティは、正しい語彙を手にしていく幾分確信が持てない分野と持てる分野という区別に<精神科学>と、<自然科学>二領域の区別が今のところ事実上一致しているが、これは単なる偶然の一致かもしれないと述べている。

測定の行為は、我々がこれまで見てきたように、自然の単なる認識ではなく、行動を伴うものであり価値を付随するものであるから、当然<精神科学>と<自然科学

学>の二領域のどちらかにのみ属するものではあり得ない。連帯的志向の中に共通の価値を確認しつつ進まなければならない。測定に込める価値の了解がなければ、測定も無意味であるのみならず、実行不可能なのである。行動と認識が分かちがたく結びついている測定の問題は、昨今の哲学に照らしても、十分に大きな問題を提示している。特に社会的価値と主体の問題はもっと議論されるべきであろう。これまでの哲学は、主体的行動を丸ごと議論することなしに、「自然の鏡」という静的な視点、あるいは実存的存在としての主体の考察があっても、様々な概念を持つ人間が概念に基づいて何らかの目的のために対象に向かって行動する主体の在り方を問題にすることが殆どなかったように思われる。それは学としての哲学の構築ばかりを目指してきたからにほかならない。学はリアルな世界から何かしらを取捨して言語で記述することで初めて成立するものであり、学は避け難くこの欠陥を内蔵するものだからである。

## 参考文献

1. イマヌエル カント「純粹理性批判」(篠田英雄訳, 岩波文庫 上, 中, 下)
2. ガストン・バシユラール「近似的認識試論」(豊田彰ほか訳, 国文社)
3. 市川浩「身体の現象学」(河出書房新社)
4. ミッシェル・セール「五感-混合体の哲学」(米山新能訳, 法政大学出版局)
5. 池田清彦「構造主義科学の冒険」(毎日新聞社)
6. リチャード・ローティ, 「哲学と自然の鏡」(野家啓一ほか訳, 産業図書)
7. 竹田青嗣「現代思想の冒険」(毎日新聞社)
8. 梶山雄一, 上山春平「空の論理<中観>」(角川文庫)
9. 下条信輔「<意識>とは何だろうか」(講談社新書)
10. 富田恭彦「哲学の最前線」(講談社新書)
11. ヘーゲル「歴史哲学講義」(長谷川宏訳, 岩波文庫, 上, 下)
12. デカルト「方法序説」(谷川多佳子訳, 岩波文庫)
13. 小坂修平ほか「現代思想・入門」(J-CC出版)
14. 竹田青嗣「意味とエロス」(作品社)
15. 竹田青嗣「現象学入門」(NHKブックス)